
読むな、危険！

貞次シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読むな、危険！

【Nコード】

N7803A

【作者名】

貞次シュウ

【あらすじ】

下品でお馬鹿な男たちのショートストーリーのオムニバス。お下劣ですので婦女子の方は読まないでくださいね（ケータイ推奨）

ロツカールムラバイ（前書き）

ネット小説しか出来ない顔文字なんぞ使ってます。掟破りとは思いますが、ちよつと遊んでみました。

ロッカールームラバイ

俺はしがない工場作業員である。昼夜交代勤務で過酷に働くいうなれば日陰もの。

しかしそんな俺にもドラマがある。当然幸せになる権利だってある。幸運が突然転がり込んで来ることもあるのだ。

これはそんな俺のドラマチックな話なのさ

現在勤める会社には、作業服に着替えるロッカールームがあり、当然そこは男女に分けられている。

もちろん男が女子ロッカー室に入ることは許されないのだが、入るなど言われれば入りたくなるのが人間と言うものである。

ある日の事。夜間勤務を黙々とこなしていたのだが、早めに仕事が終わってしまい、同工程の中川とどうしようかと相談していた。

「中川、どーするよ？帰るなら帰ってもええで」

「そーっすねー。柴崎さんどうするんですか？」

「帰る」

「ほんなら俺も帰ります」

この中川。眼鏡をかけた汗かきデブで、常に呼吸が荒い秋葉系23才である。基本的にはこんな奴は嫌いなのだが、何せエロビ、DVDを夜のビデオ販売店並みに揃えており、必然的に付き合いをしなければならなかった。

男たるもの、時には己の信念を曲げてでもやらねばならないことがある！

座右の銘としようか。

さて、着替えて帰らなければならないので、2人で更衣室へと向かう。その時、男子ロッカーへの入り口の5mほど先に女子ロッカーへの入り口が見えた。

いや、いつも見ているのだが、普段はこちらが着替えてる時間である。出入りが激しく、特に何の感情も湧かないのであるが、今日は違う……

「あれ？着替えないんすか？」

入り口で立ち止まる俺に、いぶかしげに中川が声を掛けた。

「今何時だ？」

「7時半です」

「あと30分あるな」

その言葉と視線の先を読んで、中川もようやくその意図を理解したようだ。

「行くんすか？ハアハア」

「あたりまえじゃ！」

未知なるものへの探求は男のロマンである。言つなければいま我々は川口探検隊。これは男としてやらなければならない事なのだ！

ブラジャーやパンツが襲ってくるよ（＊、＊）

今一度周囲を確かめるといざ中へ！

かゝわぐच्चゝひろしがゝ どくつに入るゝ

『今は藤岡探検隊だったな……』

ガチャリ……とノブを回すと中からは果たして何となく甘酸っぱいにほひが……

「柴崎さん、やっぱり汗臭い男んトコとは違いますね」

「嗅いどけ……」

「はい！」

シュゴオオオ（ 〃 ）（ 〃 ）

さて、ひとしきり肺の毛細血管の隅々までエロ爽やかな空気で満たすと一歩前進。中へと踏み込んだ。

「な、なにいー！」

俺が驚いたのも無理はない。男子ロッカーは上下が半分に別れて

おり、したがって一列を2人で使用しなければならない。

しかし女子ロッカーはなんと上下に別れてはいない。つまり我々の倍のスペースを使うことができるのだ。

「なんかこれ、バリむかつくんやけど……なあ」

と、中川に問いかけてみたものの、すでに奴はロッカーの物色に取りかかっており、俺の問いなど綺麗にスルーしている。

「鍵、やっぱり掛かってますねえ」

中川はそう言いながら次々とロッカーの扉の取っ手を順番に調べてゆく。そりゃそうだ。男でさえ鍵を掛けている。まして女であれば……

「開きました!」

「なにい!」

俺が駆けつける間もなく、奴はすかさずロッカーの中に顔を突っ込み、トリュフを探す豚のごとく鼻を鳴らして興奮していた。

「までや中川……」

「な、なんスか?」

「俺が先やるが! (――;)」

「ええ? 僕が先に見つけたんスよ。柴崎さんも自分で見つけて下さいよ」

豚が一丁前にブーたれやがったか……

ドスっ！

奴のわき腹にギャラクティカマグナムを叩き込む。

『豚ふぜいがなめんな、この野郎……』

中川はしぶしぶとヘブンズドアを明け渡すと、俺に不満げな顔を向けるが知ったことではない。第一奴は基本がなっていない。よく見てろ。

上に羽織るギンガムのシャツを眺め一拍三拝。そしてその手触りを楽しむように表面をなで、静かににほひを嗅ぐ。このときはまだ音を立てて嗅いではいけないのは言うまでもないだろう。そしておもむろに裏返して、そのオパールの当たる部分に……

突撃！

「むふおおお〜」

と、喜悦の声を発しながら豪快ににほひを嗅ぎ、味わわなければならぬ。これが日本古来の伝統であり、わびさびと言うものだ。小学校に入って一番最初に習うことは言うまでもないだろう。

その舌触りを楽しむように悦に入っている俺に中川が声をかけた。

「柴崎さん……あの」

なんと無粋な奴であろつ。これから妄想モードに入ろつとしている者に声をかけるとは礼を失している。そんなことは基本中の基本ではないか！

「あの……言いにくいんスけど……」

言いにくいなら言わなければよからう！

「そこ、竹中のババアのロッカーでした」

『なにー（；！）』

竹中と言えば我が工程きつてのブイク女。女というか、女を捨てている40歳の巨漢女だ。

俺は猛烈な嘔吐感に襲われ、今までの人生が走馬灯のように甦ってくる。

「甦ってくる」

誰だ勝手に復唱してる奴は？（……）

『母さん、さようなら……』

「さようなら」

『……ってテメエが復唱してんじゃねえぞコラア！』

薄れゆく意識を引き戻したのは中川への怒りだった。

ドスっ！ドスっ！ドスっ！ドスっ！

ブーメランスクエアからテリオス、さらにスペシャルローリング
サンダー（古い）が奴のわき腹に食い込んだ。

「痛いっスよ……何するんですか（；、）」

このエロ豚めが、最初に誰のものを確認するのは基本だろうが
！誰のものとも確認せずに俺に献上するとは何たる無礼！

とりあえずファブリーズで鼻と口の中を除菌すると落ち着きを取
り戻す。

いかんいかん、俺としたことがこんな事で取り乱すとは……

『ブイクの にほひに狂う 若気かな』

おお、一句出来た。あとでメモって辞世の句としとこう。

気を取り直して再び探索を始めた我々だったが、やはり他はすべ
て鍵が掛かっているようだ。

焦りを感じながら『やはり駄目なのか……』と弱気になったその
とき……

カチャン

と軽い音を立ててそのロッカーは開いた。

「うお！開いた」

まるで暗い洞窟をさまよい歩き、歩き疲れた末に見つけた宝物のようである。

期待感が高まり、下半身に血液が濁流のように流れ込むのを実感できる。

が、しかし…

しばし呆然とその開いたロッカーを眺める俺に中川が駆け寄ってきた。

「開いたんスか？」

喜び勇んで駆けつけたものの、やはり奴も俺と同じように絶望感を表に出す。

「空ですか…」

ガツクリと肩を落とす中川。しかし俺は別の事を考えていた。そしてその隣を見ると、やはり名札のないロッカーが！

『ここもか？』

的中だ。ここもやはり空のロッカーだ。ここは2つの空きロッカーが並んでいたのだ。

俺はすでに他のロッカーを物色し始めた中川を呼び止めた。

「おい、入ってみろ」

「え？」

「ここに入ってみる！」

そうである。ロッカーの上部には名札を差し込むための溝があるのだが、その隙間を利用すればもうすぐ始まるであろう婦女子の着替えシーンを満喫出来るはずなのだ。

「なるほど！中川、行きます！」

喜び勇んでロッカーに身を潜り込ませる中川。しかしその作業は容易ではなかった。

なにしろ奴はデブである。それでこのロッカーに入ろうと言うのだから、トトロにダイエットしろと言うくらいに無理がある。

しかし…エロのパワーとはこれほどのものだろうか？

パソコンが普及したのはエロゲーのおかげである。携帯の液晶が進化したのはエロ画像のおかげである。歴史的世界の英雄がその版図を広げたのも原動力はエロである。

そして今、中川の体がロッカーに収まっているのも確実にエロの力なのである。まるで物理学すらも無視したかのような映像がそこにあった。

『（…）恐るべしエロ……』

どうやら収まったようだ。

「よし、閉めるぞ」

「いいスよ」

こうして奴はロッカーへと収まった。

「どうよ？見えるか？」

中からは何かと格闘しているかのような荒い息遣いが響いている。

「…ん…ん」

「見えるんか？」

「め…」

「め？」

「眼鏡がズレました…」

（　　）

「早よ直せや」

いらいらするデブに業を煮やした俺は、自ら隣のロッカーに体を滑り込ませると、扉を閉めた。

『む…これは！？』

見えん！（、、；）

光は確かに射し込んでいるのだが、目線よりもやや上方。つまり額のやや上あたりに穴が開いているのだ。

『こ…ここまで来て諦める訳にはいかん！』

俺はロッカーの中で爪先立ちすると、その穴へと眼球を寄せた。しかし…

『あ、頭がつかえてますけど（、；）』

そう、天井はそれほど高くはなかった。従って頭を上げるには限界があつたのである。

『ほほう、やりおるなロッカーめ。しかしエロに直面した人間の英智を思い知るがいい！』

縦が駄目なら横にすればよい。俺は首をぐいと傾げると、もう一度爪先を立てた。

『見よ！この頭の冴えを』

もう少し…もう少しで天然ピンクホールに手が届く…

あと5cm…

「いででで…首の筋つった！首の筋…（、、；）」

何という事だ、この俺としたことが！

猛烈な痛みが肩から首にかけて走る。そしてそれはロッカーの中に悲鳴となって漏れた。

「首が…首があ…」

「め…眼鏡が！」

「首があ！」

「眼鏡が！」

小刻みにブルブル震え、それは一旦任務の遂行を断念する事を意味した。

「仕方ない、一度撤収や」

そう隣の中川に告げると、扉を開こうとした…が

「ノブがない…（、？）」

なんということだ！そう、ロッカーには中から開けるための機能が装備されていなかったのである。当然押しても開かない。ロックを解除するための取っ手もない…

こんな時アメリカ人ならばこう言うであろう

「オーマイガー！」

当然フランス人なら

「フォアグレア、トリュフ、メンタイクォー！」

これが大塚アナならば

「\$ @ & £……ですネ！」

と語尾しか聞き取れない台詞を言うだろう。

この時、冷や汗とはこんなに噴き出すものかと自分で驚いた。だが、もしや中川のロッカーならば閉まり方が甘くて、押せば開く可能性があるかもしれない？

わずかな望みかもしれないが奴に賭けるしかない……

「おい！そっち開くか？」

「め…眼鏡…」

全然駄目じゃん！（；）

しばらく狭くて自由にならない手でドアロック付近を探してみる。と、何やら小さな突起物が上から飛び出しているのが分かった。

どうやらこれを引つ張れば解除出来そうである。

がしかし、それはあまりにも小さく、摘む事が出来ない。

『うーむ、どないしょ？』

エロに突撃する時は人間の叡知は素晴らしい能力を発揮するが、それ以外はどうやら凡庸な脳みそしか持ち得ていないようだ。

しかしそれでもその突起物がキノコのような形状で上から摘む事は出来ないが、頭の部分の下の僅かな隙間に薄いものを滑り込ませれば持ち上げる事が出来そうなことは分かった。

『ふふふ、そうか。爪を引つ掛ければイケるじゃんよ！（、、）サエテル〜』

よしよし、ここに爪を……爪を……？

爪ないじゃん（、）

そう。実は早上がりを利用して、高級なお風呂屋さん（早朝割り引き）に行つていかがわしいふれえを堪能しようと目論んでいた俺は、爪をきれーにこれでもかと言つほど限界まで切っていたのだ。

『全然引つかからんぞー。おーい（――・・）』

またもや黙考1分半……

(・・)！

おう、そうだ。俺には仕事で使っているピンセットがあるじゃないか！

そう。半導体製造という極小製品を製造している俺には0・何ミリという小さなチップを摘むためのピンセットが必需品で、それをいつも左の胸ポケットに装備していたのだ。先の鋭さは刃物並みである。これならば容易に隙間に入れることができる。

早速左の胸ポケットから取りだそうとするが、何しろ狭い空間である。腕が思うように回らない。

む……むむ……

『あ、これやばい。絶対やばい！』

と思った瞬間

『背中つつた！背中(・・)』

日頃いかに運動してないかの証明である。妙な体制で力を入れるといったところがつるのである。

痛みに耐える！

これが男の生き様である。たぶんいま俺は輝いて見えるだろう。だがいかんせんロッカーの中では誰も見てくれない！

仕方なくしばらく妄想でもして気を紛らわすが、どんな妄想だったのかはここでは伏せておく。

やがて背中痛みも収まり、かわりにパンツの中が収まりつなくなつたところで俺は脱出作戦を続行することにした。

『と…取れた（、；）』

取れたー！

俺は声を大にして叫びたい。例えるならばRPGのような長い冒険の末、ラスボスを倒すためのアイテムをついに手にした時のようなものだろう。

かっこいい、かっこいいぞ俺！

頭の中では輝く聖剣をかざして、高らかにBGMが流れている姿を想像しているが、実際は妙に卑屈な格好で胸ポケットに手突っ込み、隣で「めがね」と唸ってる中川の声が聞こえるだけである（――；）

ようやくピンセットを手にとると、しかし今度はそれを左手に持ち替えなければ届かない。

そのまま下に降りしたいのだがなかなか届かない。

火事場の糞力！

ふんっ！という掛け声と共に力を絞り出す。いつもの力一杯よりも20%増し（当社比）だ。

グツとロッカーと体の隙間に挟まれた腕が下に滑り落ちた。

『いででで！刺さった、左手に刺さってるぅ〜（、、…）』

涙が出てきた…マジで。

しかし俺は痛みに耐える。歯を食いしばり、額に汗を滲ませ耐える！

仕方なくしばらく妄想でもして気を紛らわすが、どんな妄想だったのかはここでは伏せておく。

ようやく血が止まり、かわりにポチーンのカウパー腺液が止まらなくなると脱出作業を再開する。

『ここだ！』

狙いすましたように隙間にピンセットを差し込む。ブルブルと震える指が慎重にピンセットを持ち上げた。例えて言うならば爆弾処理班がおのれの命をも顧みず、信管の抜き取り作業をするようなものだ。

今の俺のかっこ良さはおそらくそれと似ているものだろう。

『もっ少し……』

研ぎ澄まされた究極の技が光る。そして緊張の一瞬……

『よしー！』

くいつとそれが上に持ち上がる手応えがある。しかしそのとき、遠くから女の子のしゃべり声が聞こえてきたのだ。

『まずい！』

どうやら出勤第一号がやってきたようだ。棟内に入ってきて廊下を歩いてくる。焦りは頂点に達した。

手に汗握るとはこのことだ。決して女の子が手コキする時に汗ばんだポチーンを握るという意味ではない。

さらに震える手を慎重に持ち上げる……と

カチャン

という音と共に扉が開いた！

『自由だ……（、、）』

と惚ける暇もない。すかさず入り口のドアが開く音がするや数人の喋り声が入ってきた。

『やべえ！』

しかし幸いにもロッカーの列に阻まれて姿は見られていない。俺はその声の影を窺った。

ラッキー！入り口と反対方向。これなら陰に隠れて脱出出来る。

俺は忍び足でドアまでたどり着くべくソソソと歩を進めようとしたそのとき、肝心なことを忘れていたのだ。

先ほどのからの二度にわたる妄想。それはパンツに大きなしみを作っていた。これが乾くとどうなるか？賢明なる男性読者ならば覚えがあらう！

『いでででで……先つちよくつついた！先つちよ（、、；）』

思わず腰をかがめながらも足を止める訳にはいかない！オリンピック選手が足を故障しながらも完走した感動の場面が今の俺とダブる。

『わかるぞ、あんたの気持ちが！』

あと1m……

50cm……

そして……

長い冒険を終えた……

やり遂げた……そう、やり遂げた達成感だろう、これが。

決して性欲旺盛な男子高校生が余韻に体を震わせながらティッシュを丸めているようなものではないのだ。

外に出ると朝日が祝福してくれた。爽やかな風が頬に優しい。

『しまった！忘れてた（ ; ）』

ここで俺は重大なことを忘れているのに気づいた。

『ど、どうすれば……置いてきてしまったぞ……』

いまさらどうなるものでもない。しかしここで引き下がっては男ではない！

俺は猛ダッシュで駆け出した。

『ソープの割引券忘れるとはしくった……』

早朝割引は人数限定なのだ。俺は仕事場に忘れた割引券を取りに行くために全力で走った。

おわり

ロッカールームラバイ（後書き）

こんなもの載せてすいません……。苦情が殺到するようなら修正しますので……

スナイパー・ケア（前書き）

随分以前にとあるブログで使った小ネタを使い回してるトコがありますが、知ってるかたは目をつぶってください（^^;）

スナイパー・ケア

俺の名前は……おっと、残念ながら名前を明かすわけにはいかな。コードネームで『ケア』と呼んでもらおうか。つまり裏社会に生きるエージェントってわけだ。

仕事内容？

ふ、残念ながらそれも言うわけにはいかないな。とある組織に雇われたエージェント……それだけで十分だろう。

ピリリリリリ！

高層マンションから夜景を眺め、葉巻をくゆらせている俺の耳に耳障りな携帯電話が無粋を働いた。また仕事の依頼だろう。

今度はどんなミッションだ？

テーブルの上で点滅している携帯を手にとると、美しくなめされたクリーム色のソファへ腰を沈める。そしておもむろにフリップを開いた。

「わたしだ……」

『ああ、健二ね！おばあちゃんばってんね、いま大変なことになったとつとよ！』

「あの、もしもし？間違いだと思い……」

『台所で油が燃えとるんやけど110番したほうが良かとやろうか？』

「119っ！119番ですから！（、、；）」

『あー、そうやったね。ところであんたご飯は食べていけよとね？』

「早よせんかーっ！」

プーッ、プーッ、プーッ……

俺としたことが、一般人を助けるとはヤキが回ったな。

自嘲気味に笑うと葉巻をクリスタルの灰皿に押し付ける。

そのとき再び携帯が呼び出し音を鳴らした。今度は間違いなく組織からだ。ボスが直接かけてきたということは極秘任務のようだな。

「わたしだ」

『……わたしのセリフだぞ』

「……で？」

『聞けやこら……。まあいい仕事だ。トップシークレットで緊急だが……やれるか？』

「ふん、わたしを誰だと」

「そうだったな。ではこれより 駅のトイレに別のエージェント

を送る。指示はそこで受けてくれ」

街の喧騒は眠ることを忘れたかのようなうだ。そこに溶け込むようにして俺は歩いていった。

黒のスーツに黒のネクタイはせめて俺に殺される奴へのレクイエム。胸のホルスターに収まる357マグナムが血を欲して疼いているようだ。ズシリと重量感を主張し、その凶弾を吐き出すのを今か今かと待っている。

ここか……

交差点脇の歩道にそこだけがぽかりと明るいい口を開けている。

この地下鉄の駅のトイレで次の指示を受け取らなければならない。

革靴の響かせる硬質な足音が狭い通路に反響し、それは俺自身が死神にでもなったかのような錯覚に陥る。

『沈着冷静のケア』

エージェント仲間からはそう呼ばれていた。常に慌てることなく顔色ひとつ変えずにターゲットを始末する。それが俺をそう呼ばせるゆえんなのだ。

と、階段を降りる俺の前方から、ひとりの女が上がってくるようだ。しかし……

こいつは！

本能からはじき出される信号により、俺は一瞬で戦闘態勢に入る。それまで弛緩させていた神経を研ぎ澄まされた刃物のように変化さ

せると身構えた。

あと3m……2m……1m……

直視してはいけない。視線はまっすぐ前方に向けながら視界の端でターゲットを確認するのがプロの技というものだ。そしてもちろん殺気は消し去らねばならない。素人には所詮無理難題だろうが……

そして……すれ違ったその瞬間！

チラ見。

よっしゃあ！完璧なギャルだ。デニムのフレアの超ミニスカのし
たからはやや浅黒いしなやかな脚が伸びている。そしてその奥には
パラダイスが待ち受けているに違いない。今日はついてる

首をすかさず回すとおもむろに腰をかがめ、視線の仰角を徐々に
上げてゆく。

ここで素人は間違いを犯す。殺気をみなぎらせているために女の
勘を働かせてしまうのだ。

まだだ……まだ……

じわりと腰を反対方向へ回すと両手を階段へつく。

おお！幸せの黄色いパンツですぞー（＊、＊）

しかし俺としたことが狂喜のあまり殺気を漏らしてしまったようだ。その刹那、女がこちらを振り向いた。

「ちょっ、何すんだ変態！」

「なんじゃこらーっ！」

我ながらナイスな逆ギレである。さらに畳み掛けるように俺は言い放つ。

「ここで腕立て伏せして体を鍛えるのがなぜ悪いか！」

もちろんこれには他に『通学路ほく全身』『エスカレーター腹筋』など色んなバージョンも取り揃えていることは言うまでもない。女は歯噛みして階段を駆け上がった。見事な完全勝利である。

おっと……仕事を忘れるところだったな。

肩慣らしの前哨戦に気を良くした俺は、足取りも軽く駅構内のトイレへと踏み入れた。個室が三つ並び、向かいには小便器が五つ。極々オーソドックスなつくりと言えよう。目立つのはまずい。真ん中の個室に体を滑り込ませ、扉を閉めた。

待つ時間はほとんど無かったと言ってよい。足音がトイレの中に侵入してくると、それは躊躇することなく隣のドアを開いた。

極秘任務は得てして人目につかぬよう指令が下される。果たして薄い壁越しに話しかけられた。

「俺だけど」

俺？誰だいたい？

いやまてよ。もしかこれはあの人のことでは。『俺』ではなく『オーレ』と言ったのだとしたら彼しか居ない。

ブラジルの殺人鬼『オーレ・斉藤』だ。もはや伝説だと思っ
たが……

「まさか伝説のあんたにこんなところで会えるとは思ってもみなかつたな」

同じ稼業をやる者にとっては雲の上の存在と言われている男だ。
俺の胸にも感慨深い想いが湧き起こる。

そして彼はこう言った。

「調子はどう？」

なんだおい、随分フレンドリーなしゃべり方だな。

「まあまあですな」

任務の遂行の可否を心配しているのだろうか？ふふ……いくらあ
んたでも俺をなめて貰っては困るというものだ。

俺の手にかかればあのトム・クーズでさえ裸で逃げ出して猥褻
物陳列罪でブタ箱行きだぜ。

しかし次に彼が放った言葉は俺を愕然とさせた。

「ボーナス出た？」

なんだと？！ ボーナス？

ちよつと待て、この仕事を始めて既に20年になるが、ボーナスなど一度たりとて貰ったことはないぞ……

もしかして他の奴はみんな貰っているのか？

ここは素直に答えるべきだろうか？ いやしかし、俺だけ貰ってないとなればそれだけ評価が低いと言うことを公言する事に他ならない。

いや、そんなことがある訳はない！

「も、もちろん」

やはり貰ってないなどは……俺のプライドが許さなかった。すると彼はこう言った。

「ごめん、隣に変な奴がいるみたい。かけなおすから」

なんだとおっ！（ ; ）

とりあえず隣の個室に向かって三発ほど弾丸を撃ち込んでおく。秘密保持の為ならば致し方ないだろう。

「おいおい、サイレンサーも無いのに……」

反対側の個室から聞き覚えのある声。いったいいつの間に……

「……相変わらずの無茶ぶりだな。『品格0点』のケア君」

「『沈着冷静』だ！ 何度言えば分かるんだ、ジョニー？」

「さて、これからの指令だが」

「聞けて、俺の話を」

「これから歌舞伎町へ行ってもらう。そこで次のエージェントが声をかけてくる手筈になっている。声を掛けられたら合い言葉を言うんだ」

随分と危険な場所だな。この俺にしか出来ないミッションのようだ。

「で、合い言葉だが……『ハイよろこんでー！』だ。後はそのエージェントから指示があるだろう」

「なるほどわかった」

「おっともう一つ。もう時間がない。悪いが全力で急いでもらおう……欽ちゃん走りで」

なんと、かなり過酷な指令だな。まあ目立たぬように急ぐためなら致し方ないだろう。

「わかった。ところでジョニー、あんたボーナスは貰ったか？」

「もちろんだ。なぜだ？」

「いや……なんでもない」

人混みを縫うようにして俺は風を切り、涙を切って走り抜ける……
欽ちゃん走りで。

今日の俺は危ないぜ。ターゲットには悪いが容赦はしない。血の海に沈めてぶちまけた脳みそを集めて『ウンコマン』と書いてこう。

俺は予定の時間に遅れることなく、雑多な欲望の匂いの立ち込める歓楽街へと足を踏み入れた。

さて……エージェントはどこだ？

組織の人間らしき闇の匂いを纏う奴を嗅ぎ分けながらゆっくりと歩みを進める。

だが、十歩と歩いていないだろう。すぐに黒服に身を包んだ男が声を掛けてきた。

どう見ても一般人には見えない。一見ほがらかに見せてその実鋭い視線を四方に走らせている。どうやらコイツのようだ。

「どうですか？若い娘いますよ」

「ハイよろこんでー！」

「やる気満々ですね！どうぞこちらへ」

奴の言われるままについて行くと、いかにも怪しげな店に侵入してゆく。

ほう、いきなり正面からか……気に入ったぞ。

武者震いに体をよじらせながら、俺も堂々と足を踏み入れる。暗い店内に怪しげな音楽が流れ、カウンターだけが明かりに照らされている。

「どんなのが好みですか？」

奴はメニューのようなものを掲げて俺に見せてきた。なるほど、殺し方は任せるということか。

「今日は血に飢えてるんでな」

「あー……いまちょっとSコースは空いてないんです。Mコースでどうでしょうか？」

「どっちでもいいぞ」

殺し方などどれも似たり寄ったりだ。その殺し方をしてくれと言われれば俺はプロだ。きっちり仕事をこなすだけさ。

「それじゃ2万円ちょうどになります」

なにーっ!？

それは一体どういう訳だ？貰うならともかく仕事前に金を払うな

ど聞いたことがない。

「いつから先に金を払うようになったんだ？」

「いやいや、当たり前ですよ。その代わりアッチは保証しますから」

なるほど、保証金と言うわけか。それならば良いだろう。とりあえず言われた通りの仕事を済ませば問題ないはずだ。

「ではこちらへどうぞ」

さらに奥の小部屋に連れて行かれた俺の目の前にはきわどいレザ
ーファッションに身を包んだ女がふんぞり返って座っていた。
もしかこの女はクライアントなのだろうか？

「俺はどうすれば良いんだ？」

まず詳しい要求を聞くために口を開いた。

「パンツ脱いで四つん這いになってケツあげな！」

「えっ？（・・？）」

ビシッ！ビシッ！

「ほらほら、もっと良い声でお鳴き！」

「ハイよろこんでー！（T T）」

ぬつづ……今日のミッションはハードだぜ……

おわり

Do healthing!

ここは日本一の歓楽街『歌舞伎町』である。

私は一人、顔はそのままに目線だけを右に左に、そして上にとせわしげに動かしながらこの街をさ迷っていた。いや、正確にはあるものを探していたのだ。

ヘルス！

この私、樋口利夫22歳。初めて風俗なるものを体験すべく、この欲望渦巻く街へと足を踏み入れたのだった。

「お兄さん、若い子いるよ」

「抜いて行きましょうよ」

「お探ですか」

次々と声を掛けてくる呼び込みの黒服達を掻き分ける。友人から聞いた話では呼び込みする店は危ないとの事で、安心な店を教えてもらってはいた。しかしこれだけ店が並ぶと目移りしてしまい、別の店にも食指が動くのは致し方ないだろう。

『性戯のヒロイン』

『アソコにおまかせ』

『でかいの中心でパイを叫ぶ』

などなど煌びやかで怪しげなネオンが私の性欲をこれでもかと煽ってくる。

むう……悩むところだ……

しかし結局安全策を取り、友人の勧める店へと足を向けた。だがこれは決して私がヘタレなわけではない。友人の顔を立ててやったと解釈してもらいたい。

『あそこの110番』

とある雑居ビルの3Fにその店はあった。

小さなエレベーターに乗る前に深呼吸し、心を平静に保つ事に努める。なにしろ行くのは風俗店。もし風俗デビューなどに見破られたら嘲笑の対象になるだけでなく、あるいはボッタクリの憂き目に遭うということも想定出来る。

ここは堂々と、さも慣れた遊び人を装わなければならないのだ。

ここは日本の頂点に君臨する歓楽街歌舞伎町である、もはや戦場なのだ！

エレベーターのボタンを押す。なにやら中がイカ臭いのは気のせい
いか？

すぐに3Fに到着し、ドアが開いた。

「いらっしやいませ！」

おお！びっくりした（ ; ）

扉が開くや否や元気な声で一発かまされた私。なんでボーイがい
きなり出迎えているのだ？

いや、これは作戦かも知れない。客の反応で初めて可否かを判断
しているのでは？

おつとつと……引つ掛かるとでも思ったのか？このヘナチン野郎
(; _ ;)

私はやあらポケットに手をつ突つ込むと、足を開き気味に歩み寄り
尊大な態度で声を掛けた。

「おつ」

完璧だ。この堂々たる態度、とても初めてとは思うまい。

男は愛想良く俺を暗い店内へ導くと問い掛けてきた。

「当店のご利用は初めてですか？」

え？ (;)

「あ…と、当店は初めてダス……」

うわああーっ！ (; ;) やべえ。

一瞬どう答えたら良いのか判断出来なかった私は、思わず『この
店』を『当店』などと言つてしまひ、しかも語尾は『だ』
と『です』が混ざつて『ダス』になっている！

み…見破られたか？いや、まだ決定打とは言えぬ。まだ挽回のチ
ヤンスは充分あるはずだ。

続いてまたボーイが口を開く。

「コースはどうなさいますか？」

な、なにいゝ！コースだと？

こ、これはどう答えれば良いのだ……

いきなり何の説明も無しに聞くと言う事は、恐らくほぼどの店も大してシステムは変わらないと推測出来る。ならば、当然知っているかの如く答えなければ怪しまれる！

当たり障りのない言葉なら大丈夫か？当たり障りのない……普通の……そうか！

「レ……レギュラーで！」

「レ……？あ、お時間ですが？」

フルスイング空振りーっ！

まずい！これはかなりまずい！何とか取り返さねば取り繕わねばならない事になる！

逆ーっ！（ ; ）

「あ、ああ時間ね、時間……」

最初から時間て言わんかいボケーっ！

この私ともあるうものがなんたる醜態だろうか！

とりあえず40分コースが標準のようだ。それを選択すると、続けてまたもやボーイが聞いてくる。

「ご指名はどうされますか？」

おーっとつと、これが手か？あーん？

それでポツキリとか言っというてぼったくる気ではないのか？私を誰だと思ってる。そんな手に乗るはずがなかるう！この欲望をエサに生きるゴキブリ野郎めが（＊）

だがボーイはそれを見透かしたかのように付け加えた。

「二千円のみ追加ですよ」

なんだコイツ、なんか見下したような喋り方じゃねーの？（
；）

ここはひとつ、ドーンと構えねば…

「お……おう、するつもりだよもちろん」

私は渡されたアルバムをおもむろに開くと、ちよつと純情そうな娘を指名した。

「おう、今日はこの杏奈ちゃんにするわ」

「すみません。この娘は今日居ないんですが……」

なんですと？居ないなら最初から言わんかい！（、皿、；）

「ほら、ここに曜日が書いてありますんで……」

見れば写真の右上に出勤する曜日が書いてあるではないか。

むう…これはマズイ…。『こんな事も知らんの？』みたいな顔で見られている気がする（、、；）

だが、私の機転はこういう時天才的な冴えを見せる。

「あれ？きょう土曜日じゃなかったっけ？」

「いえ、火曜日です」

……チヨット離れすぎだったか？まあいいか。

再度別の娘を指名すると、いよいよ部屋に通される。

ふふふ、私とあるう者がちょっと心臓がときめいてしまったようだ。高鳴る鼓動と欲望で我が息子がいきり立ってきた。

おお、息子よ。もう少しのチン抱だぞ

ここで私の頭に素晴らしいアイデアが浮かんだ！まさに天才的、

これぞ天才的と言つべきものだ！

まず素っ裸になり、自慢の大黒柱を隆々と掲げ女の子を待つ。

なにも知らずに入ってきた女の子はそれを見て驚きの声を上げるだろう。インパクトが大事なのだ！

そして強く印象づけられた大きなイチモツは彼女の心を虜にし、まあ恐らくはアソコをナイアガラ状態にして挿れてくれと懇願するであろう。普通のエロ男ならば一も二もなく突っ込む所だが私は違う。こつ言つのである。

『そこは好きな男にとつときな』

クールである。超クールうう（　　）

こんなことなら成人用パンパース買ってきていれば『とつとけ』とダメ押しできたのだが、まあそこまで完璧を求めることもなからう。

それでも当然女は私に溺れ、金を貢ぎながら私の体を求めるのだろつな。

幾らくらい貢いでくれるだろうか？

そうと決まれば善は急げである。

私は服を脱ぎ、パンツを投げ捨てるとソファーにどつかと座り、グイグイと息子をしごきあげる！

更に私は思い切りインパクトを与えようと工夫して、カエルがひっくり返つたような態勢で宇宙戦艦ヤマトをおっ勃てた。

ヤマト発進！ 『おお、恥丘か……なにもかもみな恥ずかしい』

よしよし、この沖田艦長の名セリフも付け加えとくか

今か今かと期待する時間は長く感じる…

ようやくカーテンが開き、人影が入ってきた（、＊）！来た
っ！

「失礼します。お飲物をお持ちし……」

な……なにいゝ！

ボーイいい？（；。。）

そういえば入る前に飲み物を聞いてきたが、まさか貴様が持つて
くるとは……

奴も硬直しているが、私とてそれは同じである。

ただ……反り返っていた自慢の宇宙戦艦がしわしわと萎え……最
後にペタンと萎んだおいなりに張リ付いた事を除いて……

お
わ
り

後ろから前から…

朝の駅のホームは相も変わらずサラリーマンやOL、学生たちで溢れかえっている。

張り切って街を照らす太陽とは対照的に、一部の固まって奇声をあげる学生たちを除けば、一見すると誰も無口で憂鬱そうな表情を隠さずにボーっと突っ立っていた。

かく言う俺もその中のひとりだ。新調したばかりのスーツに薄い鞆を下げて、見るともなしに反対側のホームを眺めていた。

時計を見ながらいつもより三分早く着いたな……と、ため息をついた。一分の待ち時間もやたら長く感じ、苛立ちを覚えるのだ。

それがきつかけだったのかは定かでないが、ここでいつもの朝にちよつとした変化が訪れる。たまには別の車両に乗ってみようと考えたのだ。

そうして俺は前から五両目後方のドアの列を離れて、さらに後ろの車両へと歩き出した。

少し立ち位置を変えろとなんだか駅の風景も変わるようだ。居並ぶ人々の顔をチラチラと見ながら歩を進めて行くと、はっと目に付く女性を見つけて足が止まった。

（こんな美女がいたとは……）

眼鏡をかけ、知的な雰囲気のスーツに包んだスレンダーな美女が、

まばゆいばかりの光彩を放ちながらそこに立っていた。

満員電車のなか、オヤジどもに取り囲まれて目的の駅まで行くのが幸せか、それとも美女を側に置いて行くのが幸せかは問うまでもないだろう。

俺は迷わずその列へと列ぶことにした。

やがて塗装をケチったかのような金属肌を剥き出しにした電車がホームに滑り込んできた。ここからが男の闘いだ。

周りの野郎どももおそらくは同じ考えを持っているに違いない。遠慮や謙虚な気持ちは捨て去らねば勝利は有り得ないのである。

ドアが開く。もちろんこんな駅で降りる奴など皆無に等しい。――
齊にドアへと殺到するライバルたち。

目標をロックオン！

しかし、俺とターゲットの間には、何人ものオヤジどもが割って入ろうとしているではないか。

（させるかあつ！）

血しぶきが上がり、火花は山々を照らし、谷は吠える（イメージです）。俺は迫り来る敵をちぎっては投げちぎっては投げ、血震いしながらメガネを目指す（あくまでイメージです）。

前方のオヤジの脇に腕をねじ込むと、左に押しやりながら体を割って入れた。

（まだだ……もう一人！）

今度は背の高いオヤジを右に押しやろうとしたが、なかなか動かない。ぴつたりと眼鏡美人をマークしてまるでストーカーのようだ。

（くっ……この変態オヤジめが……）

『敵を知り己を知れば百戦危うからず』

ふと頭に浮かんだのは中国の故事だ。なるほど奴は体が大きく力が強い……

（だが、足元はどうか？）

ここで俺が繰り出したのは『膝カックン』だ。己の膝を相手の膝裏にぶつけてバランスを崩すという世にも恐ろしい格闘界でもおなじみの必殺技だった。

不意をつかれた男の体がバランスを崩す。このタイミングを逃してはならない。俺は人波に押されるフリをして男をリング外へ押しやった。

（やった！）

歡喜の表情を浮かべる俺の目の前にはあの眼鏡美人の後ろ姿が……

（な、なんですとーっ！）

後ろ向きではない、こちらを向いて正面同士の密着スタイルでは

ないか！

思わぬ展開に動揺が隠せない俺とは対照的に、何事もなかったかのように素知らぬ顔で電車は動き始めた。

その直後である。眼鏡美人と密着するというシチュエーションに反応した心臓がフル回転しだすと、大量の血液を下半身の一点に送り込み始めたのだ。

（い、いかん！）

俺が慌てたのも無理はない。眼鏡美人は両手でバッグを前方に提げているのだ。そしてその手はモロにマイ・シークレットゾーンに押し付けられているではないか。

かたや俺の両手は無理に突撃した為に捻れて他人の間に挟まり、元に戻せないでいるのだ。

（痴漢に間違われる！）

この恐怖が頭を支配する。こんな所で人生を終わりにするわけにはいかない。俺はまだまだ若いんだ。

しかしその意志とは反対に、どこまでもマックスを目指そうとする、場の空気が読めない我が息子。

特番の警察の取材でよく痴漢で捕まっているオヤジがいる。

『何にもしてねえよ！』

と叫びながら、顔となぜか股間にモザイク入れられたみつともない姿を晒す性犯罪者……

（冗談じゃねえ！）

俺は唇を噛みしめると神経を逸らすべく眼鏡美人から視線を外し、上を見上げる。

（こ……これは？）

と、そこにあつたのは艶めかしい肢体を露わにした、ほし あきちゃんを載せたゴシップ誌の吊り広告ではないか！

「エイ、エイ、おばーい（＊　　）ノ」

ちがーう（、　、　・　・　）！

完全に裏目である。火に油、過食症に食い放題、風俗前にユンケルだ。

もう股間は六甲の山々ほどにそびえ立ち、おいしい水まで絞り出さんばかりではないか。

しかしここで俺はあることに気付いた。確かに股間はデンジャラスな状態ではあるが、決して意図してやっているわけではない。しかも触っているのはむしろ相手のほうなのだ。嫌ならば向こうが手をどかせば良いだけの話ではないか！

そういうことならばこの状況を楽しんで良いのではないだろうか？

1バイトの頭脳でそのような結論に達した俺は、ようやく周りを見渡す余裕が出てきた。すると、何やらケツがやけに熱くなっていることに気が付いた。

（ん……なんだ？）

じんわりと尻を湯たんぽで温められているような感覚。そしてねっとり貼り付いてくるような感触。

と、そのとき湯たんぽがぬるりと蠢いた。

（え？ え？ もしかしてこれって……ケツ触られてるのか！）

今度は後ろに神経が集中した。男のケツをまさぐるなど、これには聞いていたが『痴漢』ならぬ『痴女』に違いない。

いや、前の眼鏡美人も一向に手をずらさないところを見ると同じ類なのかも知れないのだ。

前から後ろから……こんな電車なら毎日乗っていたい

そんな妄想をしていると、後ろの痴女が気になるものである。俺はこれでもかと首を回し、後ろをチラリと確認する。そしてそこに見たものは……

（誰だ、このハゲオヤジ） ；！）

そう、ツルツルに禿上がった頭とは対照的に濃い眉毛のオヤジがニヤニヤしながらそこにいたのだ。あまつさえ目が合つと悪びれる風もなく黄色い歯を見せてニヤリと笑った。

（もしかして……ホモの痴漢？）

頭の中はパニックだ。よもやホモの痴漢がいるなど考えも及ばなかったのである。悪寒が背中を走る。鳥肌が首まで上がってきた。

（どどど、どうしよう？）

硬直する俺を見透かしたかのように、オヤジの手は激しさを増した。

そこにはB L小説のような甘さなどひとかけらも存在しない。これが現実だ。十年くらい経てば『オジーンス・ラブ』なるジャンルが存在するであろう。

（と、とにかく逃れなければ！）

俺はなんとか逃れようとケツをよじってはみたものの、そんなものの何の解決にもなりはしない。それどころか眼鏡美人に息子をぐい

くいと押し付ける結果となってしまうたのだ。

その時、見下ろしていた彼女の頭が動き、睨みつけるような表情で顔が向けられた。

（めっちゃ怒ってはるーっ）（；！）

このままでは俺は痴漢のレッテルを貼られてしまうだろう。いきなり手を掴まれて『このひと痴漢です！』などと叫ばれたらどうしよう？

すかさず俺もオヤジの手を掴んで『このひと痴漢です！』と叫ぶのか？

出来ん！（――；）

シチュエーション的に一番恥ずかしいのはどう考えても俺だ。

例え罪を逃れたとしても、この電車を利用することなど出来はしない。

おそらく陰で『穂茂尻撫朗』ほもしりなでろうや『ゲイ達者』などと勝手にあだ名され、下手すれば都市伝説にも成りかねない。

目の前が真っ暗になってゆく。それでも俺の息子は相変わらず場の空気を読まずに元気はつらつだった……

さらに激しさを増すオヤジの手。さらに激しさを増す俺の腰の動

き。さらに激しさを増す彼女の怒りの表情。

その激しい水面下の沈黙がついに破られた。

「ちょっと、何してるんですか？」

眼鏡の奥のまなじりを裂いて、彼女の一言がついに出了たのだ。

心臓ドッキーンである。

この時とつさに考えたのは責任逃れだ。こうなりやもうヤケクソである。俺はすかさず彼女の言葉を伝言ゲームのように後ろへ送った。

「ちょっと、何してるんですか？」

そのさまを見た彼女が言葉を続ける。

「いい加減にしてください」

「いい加減にしてください」

ここで彼女は苛立ちを感じたのか、少しトーンを上げた。

「大声だしますよ」

「大声だしますよ」

そこまで言うと、今度はオヤジがつぶやいた。

「ホントは好きなクセに」

俺は反射的に前に向き直り、その言葉を繋いでいた。

「ホントは好きなクセに……あ（、、？）」

烈火のごとく怒った眼鏡美人。車内のガラスが震えるほどの大声を張り上げた。

「痴漢でーす！」

次の瞬間いきなり羽交い締めにされた。振り向くとそのハゲオヤジだ。

「コイツですね！」

「オメエだろが！（、、；）」

かくして俺は人生の落伍者となりはてたのだ。

『気を付けよう、眼鏡美人とホモオヤジ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803a/>

読むな、危険！

2010年10月10日08時14分発行